

原作…山本周五郎

脚本…黒澤明

4 社殿の中

灯火(ロウソク)を囲んで若い侍が九人車座になっている。

井坂「……うん……とにかく、伯父は話にならん……我々の決意を述べ、奸物(かんぶつ)粛清の意見書を渡すと、さつと目を通して……これでも城代家老だ……この位の事はお前たちに云われないでもわかっている」

寺田「馬鹿な……じゃ何故……」

井坂「……俺もそれを云った……城代家老が……次席家老と国許用心の汚職をしりながら、何故今日まで見逃していたのか……すつと、ニヤニヤ笑って……おい、俺がその汚職の黒幕かも知れないぞ……お前たちは、この俺を少し薄(うす)のろのお人好しだと思って、案山子(かかし)がわりにかつぎ出すつもりらしいが……一番悪い奴は一番善人面(ぜんにんづら)をしているものさ……危ない危ない……そう云うと、いきなり意見書をビリビリ……」

保川「破いた?!」

井坂「うん……無茶なんだ、まったく……」

川原「それで？」

井坂「……それで、俺は……伯父にははっきり見限りをつけて……都合(おおめつけ)合わせのとおり、話を大目附(おおめつけ)の菊井さんのところへ持ち込んだ」

寺田「菊井さんはどうだった？」

井坂「菊井さんはやつぱり話がわかる……初めは、困った顔をして、御城代と相談の上と逃げを打っていたが……俺が、今の伯父の話をする、と、びつくりしてね……暫く考え込んでいたが……よろしい……この際、貴方(あなた)達若い人と共に立ちましよう……ついては、一ぺん貴方達とゆつくり話し合いたい……なるべく早く、貴方の仲間を集めて欲しい……と、こういう話なんだ」

寺田「菊井さんはやつぱり本物だ」

河原「うむ……話せる」

保川「有難い……大目附が味方につけば千人力だ……薄のろのお人好しを案山子がわりにかつぐのとはわけが違う」

この時、薄暗い社殿の奥から、誰かごそごそ這い出して来る。

「失礼ですが……皆さん」

一同、びっくりして見る。

這い出して来た人物は、月代も髭も伸び放題、垢じみた着物や袴もつぎはぎだけなの、あきれる程の尾羽うち枯らした（落ちぶれてみすぼらしい事）浪人である。

「……どうもその……皆さんのお話をうかがっていると……」

寺田「話を聞いた？ こいつ……逃がすな！」

一同、おっとり刀（急な出来事で刀を腰に差す暇もなく手に持ったままでいる事）で浪人を囲む。

浪人「ま、落ちついて下さい……私は逃げもかくれもしません、その気があるなら、のこのこ出ては来ませんよ」

井坂「!?……しかし、貴様、なんだってこんなところに……」

浪人「お恥ずかしい話ですが、旅宿賃にも事をかいて、ここで一夜をあかそうとしていただけです……それで、はからずもお話を聞いてしまったわけですが……いや……盗み聞きというものは妙なもので……その岡目八目と申しますか、話している当事者より話の筋目がよくわかる……」

井坂「（何か云おうとする）」

浪人「（それを手でおさえて）……ま、参考のために聞いて下さい」

と、不思議と人をそらさぬ話術でしゃべりまくる。

浪人「……私は御城代の顔も知りません、大目附の菊井と云う人も同然です。しかし、それだけ、先入観なしに、その御二人の話の味だけを判断できると云う取柄があります……皆さんは、どうも御城代を小馬鹿にしておられる。おそらく見ばえのしない……と云うより、一見間のびのびした御風采の方じゃないかと思うのですが……」

一同、くすぐったそうな顔をする。

浪人「……そうらしいですな……しかしですよ……私が御城代のお話を聞いた限りでは、どうしてなかなかの人物です……自分が馬鹿だと思われているのを気にしないところだけを見ても大人物です」

二、三人、馬鹿にしたように笑う。

浪人「（それには構わず）ところで、大目附の菊井という人ですが、この人は御城代とはまったく逆ですね……こう云っちゃ何ですが、皆さんが菊井さんはやつぱり話がわかる、やつぱり本物だ、なぞとおっしゃっている点から見ても……まず、見かけは立派な人らしい……どうですか」

一同、いやな顔をして黙っている。

浪人「そうらしいですな……しかし、私に云わせると、その云ってる事から判断して、菊井という人は信用出来ませんね」

保川「黙れッ！ おとなしく聞いていれば、つけ上がった……」

浪人「ま、ま……若い人は、そのようにすぐ怒る……だから、どんな間違いを……」

保川「何が間違いだ」

浪人「そうじゃありませんか。御城代に意見書を破られてカッとなり、かんじんの御城代の話の意味を少しも考えもしないで、大変な間違いだと云うんです……もし、その大目附が黒幕だったら、どうするつもりです」

井坂「大目附が黒幕？」

浪人「御城代は、自分が黒幕かも知れんぞ、とおっしゃったんでしょ……これは、とんでもないところに黒幕がいるって事をほのめかされたんじゃないでしょうか……すると、大目附だろうとなんだろうと、一応疑って見るべきでしょうね……私は疑り深かすぎるかも知れませんが……しかし、私もね、二年ほど前、みなさんと同じように奸物かんぶつしゅくせい粛清つてやつをやったんです、ところが、一番信用してた老職の一人が黒幕でね、逆にこっちの方がうまく料理されて、このざまです……だから、皆さんの話が、他人事とは思えず、よけいなおせっかいに飛び出したわけですが……どうも、私には御城代の方が本物で、菊井つて大目附が喰わせ者だつて気がして仕方がないんです……御城代のおしゃつたとおり、一番悪い奴は一番善人面をしている、危ない危ない、ですよ」

一同、ここに至っては謹聴する。

浪人「……それにね、大目附が皆さんを焚きつけるのも役目柄おかしいし、皆さんと話し合いたいから至急集めてくれと云うのも臭い、皆さんを集めといて一網打尽と云う手もありますしね……もつとも、皆さんの名前がわかってれば、その必要もないわけですが」

井坂「……我々の名前は、意見書に書いてあったんですが……伯父が破いたので……」

浪人「すると、大目附は……あなた貴方の他には誰も……じゃその、皆さんを集めろつて話には乗らないで、少し様子を見る事ですな……」

井坂「(不安そうに)しかし……大目附とは、今夜、ここで話し合う事にして来たんです」

浪人「えッ!! ……今夜……ここで!!」

一同も顔を見合す。

浪人「……どうでしょう……誰か見張りを……いや、これは、みんな私の思いすごしかも知れませんが……しかし……とにかく、用心に

こしたことはありませんからね……」

井坂、そわそわと出て行こうとして格子に手をかけるが、
そのまま表をじっと見て立ちすくむ。

寺田「どうした？」

井坂「何か動いた……あッ……誰か……」

寺田「菊井さんが来たんだろう」

井坂「いや……それが……」

みんな格子に走り寄って、表を窺がう。

5 森の中

静まり返った杉木立——その杉木立から木立へ人影が走る。
続いていくつかの人影が地を這うようにして素早く杉から
杉へと走る。

6 社殿の中

ギョツとして表を窺がっている一同。

7 森の中

杉から杉に移動しながら、ひそかに寄せて来る人影は少
くない。

8 社殿の中

一同、棒立ち。

浪人「……どうやら、岡目八目ズバリらしいですな」

寺田、無言で身をひるがえすと灯火を吹き消そうとする。

浪人「そのままそのまま……気づいたとわかつてはまずい……相手に
手間をかけさせて、その間に逃げましょう」

井坂「逃げる？」

みんな血相を変えて、刀の鯉口を切っている。

浪人「いけませんいけません……今、刀を抜いても怪我人が出るだけ
です……さ……こちらへどうぞ……この奥に床のぬけたところが
あります、そこから床下へ抜けて……ここです……さ、皆さん、
お先にどうぞ……私はつかまつても別に困りませんから……さ、
お早く」

9 藪の中

若侍九人と浪人、人かたまりになって逃げて来る。

浪人、急にたちどまる。

浪人「みなさん……ちょっと待って下さい……大変な事を忘れました、御城代が危ないです！」

保川「城代が？」

浪人「そうです……いいですか、このような事態になって見ると、大目附の菊井が黒幕と断じてまず間違いない……すると、御城代の、一番悪い奴は云々、と云う話は菊井にとつてまさに青天のへきれキだった筈です……菊井はおそらく御城代も襲ったに違いありません」

井坂が、急にうめき声を上げて走り出そうとする。

浪人、それを抱きとめる。

浪人「待って下さい……御城代のところへ行くんですか」

井坂「勿論もちろん」

浪人「だったら……ちょっと……」

井坂「とめないで下さい……みんな私が……私の間抜けから……こんな……」

浪人「だからです……この上、間違いを重ねないように……よく考えて一ツ……」

寺田「ウム」

と、大きく頷いて、

「おい、井坂、貴様、何もかも自分の責任だと思って焦っているらしいが、貴様是我々の打合せどおり行動しただけだ。責任は我々一同にある」

井坂「しかし……伯父の身の上にもしもの事があつたら……俺は……」

寺田「馬鹿……その気持ちは我々だって同じだ……なるほど、貴様は御城代の婿養子だ……しかし、この際、そんな個人的な感情で、勝手な行動をとるのは許さん……いいか……死ぬも生きる我々丸人……」

浪人「十人ですな……私も及ばずながら……」

(WIPE)

10 城代の屋敷裏

宏壮な土塀がのび、邸内を照す月明かりが大樹に影を落としている。

その影の中に腕組みをしてうずくまっている、浪人。

浪人、何かをしきりと考えている。

その顔にナレーションがかぶる。

【レッスン・独白】

浪人「いや、驚いたな、俺の当推量あてずいりようがこうまで当たるとは……ウム……

……これで俺の云ったとおり、城代家老の身の上に何か起こってる
とすると……俺の信用は絶大になるぞ……さしあたり、俺はまず、

あの連中の相談役、いや、軍師格におさまれる……ウム……俺は、
この夢を絶対にはなさない……この機会をものにして、何とか職
にありつく手だ……仮に仕官が出来なくても相当な礼金ぐらいく
れるはずだ……井坂とか云うあの一味の中心人物が城代家老の婿むこ
とくれば本筋だからな」

塀の上から押さえた声。

浪人、見上げる。

塀の上から井坂が覗いている。

井坂「どうも貴方の推察どおりらしいんです。どうか相談に乗って下

さし

と、手をさしのべる。

浪人、しめたとばかり立ち上がり、井坂の手にすがって塀
を越える。